

実践報告 (Report)

保育者・教師養成課程における初年次教育としての 施設(学校)見学を充実させる事前・事後学習の実践(3)

——事前指導でのテーマや事後指導での討論に注目し、
学生の主体的学びの促進を目指した改訂版「施設調べ」の試み——

**The Pre and After – Study Practice To Enhance the Effect
of School Visit as Education of the Freshman in the
Training course of Nursery and Elementary school
Teacher (3) – An Attempt to Enhance Active Learning
of the Students by Revised Version of the Preparatory
Task for School Visit, Focusing on Child Development
and Discussion of the Students in the Pre and After
– Study Practice –**

服部 次郎*
HATTORI, Jiro*

要 旨

改訂を加えた事前・事後学習プログラム（施設調べ）を用いて、その効果を検証した。改訂を加えた部分は、例えば観察実習のテーマには、必ず児童の発達という視点を入れることを指示し、「施設調べ」の様式の中に、討論を意識させる項目を加えることで、見学の価値を一層高めることができると予測した。その結果、こうした改訂の効果が感じ取れる学生の考察が見られた。例えば、「今回の観察実習を通して、様々な年齢層の授業を見学したことによって、子どもの教育を長期的な目標で捉えることができ、それぞれの年齢の子どもはどのような接し方をするとどのような反応をするかについて知ることができた。また、討論やまとめ作業をしたことによって、その経験を濃密なものにすることができ、他のグループからは自分が調べきれなかった様々な視点からの意見を取り入れることができた。」といったものである。最終アンケートの結果でも「施設調べ」をすることの意義をクラス全員が認めており、今回の研究においても「学びの主体性」に焦点を当てた「施設調べ」の活用（「調べ学習」）は大きな意義をもつことが確認された。

キーワード：初年次教育，施設（学校）見学，学びの主体性，調べ学習と討論

Key words：Education of the Freshman, School Visit, Activeness in Learning, Preparatory Task and Discussion

福山小学校

事前レポート

2013年6月11日（火）



校長：宇土泰寛先生

〔校訓〕 強く 明るく 美しく
新しい時代の学校づくりへ向けて



本校は学校教育理念「人間になろう」のもと、私学として独立性を発揮しつつ、子どもたちの確かな学力、豊かな人間性を育む教育の推進に努めています。

未来志向とひらかれた学校づくりであり、子どもたちの人間としての品性、生きる力、学力を高め、世界の学校ともつながり合うような小学校を目指しています。

〈本校の特色〉

昭和27年に 学園一貫教育の一翼を担うべく 創立された。開校当初は男女共学。昭和39年以降、女子のみの小学校として現在に至る。
平成24年に開設60周年を迎えた。校長の推進により福山中学校への進学、その後の本学高等学校、大学へと進学できる道が開かれている。

〈教育の特色〉

- 独自の教育活動：エコ活動・国際理解、国際交流
↳ 考える力、活用能力、表現する力などの養成を図っている。
- 個性と共生の力を育む多彩な行事や活動
 1. 子どもたちの個性を伸ばすべく、英語・音楽の発表会、図工作品展、作文や書き初め、百人一首大会、縄跳び大会
 2. 共に学び共に生きる力を育てるための校外宿泊行事
- きめ細やかで丁寧な指導・品性の育成
特に挨拶や言葉遣いなど
- 行き届いた教育活動
- 人間性を広げるワリプト×リアンセミナー
本学園名の「福」の学術的価値ある「ワリプト×リア」を冠した名称のもと、
伝統・アート・サイエンス・コミュニケーション・スポーツを柱にした講演会を年間約30回実施する。

図1. 受講学生の事前学習①

⚠ 見学に関する注意点 ⚠

見学させてもらっているという立場をわきまに行動をする。(時間厳守, 私語厳禁)
マナーを守る。教員および児童に対して適切な言葉遣いを用いる。指定の名札を必ずつける。

観察おびの ① 先生の授業の進め方

自分の視点、



ふと思った
ずにメモをとる!

→ 先生がつくったプリントがノート どちらで授業を進めていくのか。
黒板はどのように使っていくのか。図などもかいたりするのか。
先生の授業の工夫を見つけ、動きも観察する。

② 生徒の様子

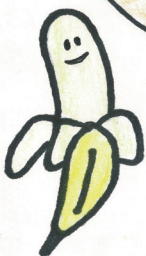
→ 先生に話するとき友達に話すときの言葉遣いが区別できているか。

③ 教室について

→ 机の配置はどのようになっているのか。(クラス何人か。
時計やゴミ箱の位置について)

教育内容や教育方法のちがひ

この前は幼稚園を見学したので、幼児と比べて、児童はどのくらい身体的にも学力的にも成長しているのか。先生と生徒のやりとりなど。例えば、先生は集中力が途切れてきた子にはどう接するのか。授業中での発言は挙手なのかランダムなのか。教育方法としては、児童の反応にねって先生はどのように指導援助を行うのか。例えば、間違えた子がいたら、その子に個別に教えるのか、全員を注目させてクラス全員に教えるのか。



今回の実習における私のテーマ

図2. 受講学生の事前学習②

福山小学校 事後レポート

2013年6月11日（火）

観察するときの
自分の視点



2年B組

国語（高井先生）

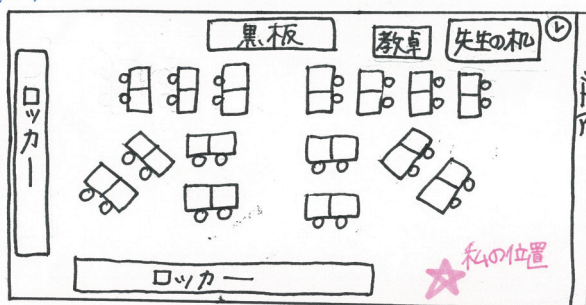
1 先生の授業の進め方

まず、当番の2人の児童が前に立つ。そしてその2人の掛け声にあわせて1つの詩を2度みんなが音読をする。それからあいさつをして授業スタート。「いなばの白うさぎ」の動画をスクリーンにうつしてその絵の動きに合わせて先生が音読する。その後生徒たちに登場人物を質問して、生徒が答えたら、ノートに自分の気に入ったところを書かせて発表させる。最後に先生が「せんがりの田」という昔話の本を音読し、生徒は静かに聞く。

2 生徒の様子

先生に話するときと友達に話するときの言葉遣いに区別はできていない。生徒同士どうもさくなく「静かにして」と注意し合う。中には授業中いきなり座るのではなく机にもたれた状態で授業をきく子もいる。先生の質問にはほとんどの子が挙手する。1人の子が異様に発言する時間が長い。「話が長いー。」などと言ったりする。生徒は先生に当ててもらえるとすごくうれしそう。

3 環境の構成（教室について）



- ・1クラス 30人
- ・机の高さがおそろしく身長に合わせて少すうちかう
- ・黒板の右上に、
6月の目標「健康な身体をつくろう」
今週の目標「きちんと洗いうがいしよう」
という紙が掲示されている



自分のテーマについて
学べたこと①

<子どもたちの活動>

- ・授業の最初に詩を2回音読する。
- ・パワーポイント「いなばの白うさぎ」の動画をみながらそれに合わせて先生が音読するのを聞く。
- ・ノートに「日にち、題名、気に入ったところ」を書いてまず隣同士で見せ合い、先生に当てられた4人がみんなの前で発表。
- ・昔話の本「せんがりの田」を先生が音読するのを聞く。

<教育方法>

- ・基本的に挙手制、当たったら立つ。
- ・用意ができていない子に机に寄り添って援助する。
- ・注意すべきは個人的に静かにする。
- ・ほぼ全員の作業が終わるまで待っている。
- ・ほとんどの子が発表できる様に当てる。

図3. 受講学生的事後学習①

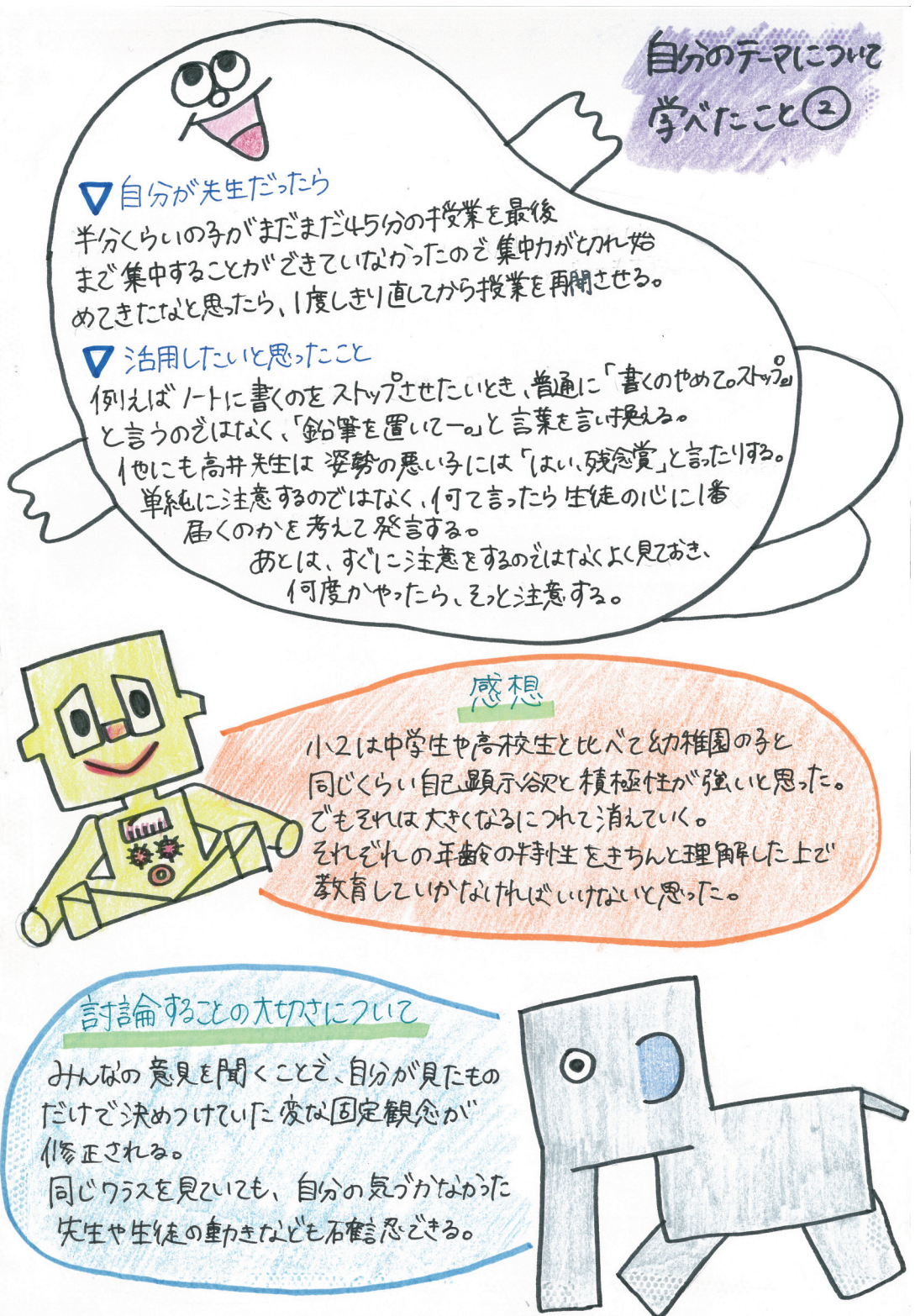


図 4. 受講学生の事後学習②

1. 研究の背景と目的

専門的な職業のひとつである保育者・教師の養成課程においては、実習を通して現場の感覚を体験させることの重要性が叫ばれてきた。その中で、初年次の施設(学校)見学の効果として、養成校での理論学習の必要性への認識が高まるという効果(中津ほか2007)、職業へ就く気持ちがさらに強くなるというキャリア教育的効果、発達段階への深い理解の必要性の認識(奥ほか2009)などがあげられる。そこで、実習に向けた事前・事後指導にさまざまな工夫をこらす養成校が増えてきている(鈴木2006;須藤ほか2009)。鈴木(2006)は、「ただ見る」場合と「目的意識も持って観察する」場合とでは大きな違いが生まれることを述べ、「意識して観察するとたくさん発見があり、観察内容も広がり、記憶にも残り、内容について考えることもできる」ことを指摘している。このような目的意識を持って観察するという姿勢を生みだすには、何らかの工夫が必要と思われる。その工夫に大きな関係をもつと考えられる要素のひとつが、学びを促進させるための「内発動機」にあるといえる(鈴木2004)。鈴木(2004)の論述とも一致すると思われるが、筆者の活用してきた「施設調べ」の枠組み(服部, 2012)では、その中にキャラクターを登場させるといったストーリー性や見学実習のテーマをあらかじめ決めておくなどといった問題解決を促す設定などの工夫を取り入れて、学生の学びを促進する指導を実践してきた(図1~4)。

今年度は見学実習の事前・事後指導において、特に、「発達の視点」と「討論」に焦点を当てることで受講学生の学びをさらに促進するよう試みた。このため見学実習前の「施設調べ」において、観察テーマの一つは、必ず、児童の発達という視点からのテーマを設定するよう学生に求めた。また見学実習後には必ず討論をするために、次のような手続きを踏むようにした。すなわち、まずはクラスの中の小グループにおいて各自が観察実習で得た情報を紹介し、情報の共有化を図るよう促した。例えば、小学校の見学実習ではクラスの全受講学生22人が5つの小グループに分かれ、可能な限り其々のグループが見学したい学年を選び、合計5つの異なったクラスで見学実習を行った。その上で、得られた情報についてはお互いに感想や意見を出し合い、討論をした上でグループとしてのまとめを作成してもらった。次の授業ではそのグループのまとめをクラスの全員の前で発表し、それぞれのグループが観察できたクラスや時間帯だけではなく、ひとつの教育機関の全体像(全学年の姿)をクラス全員が共有できるように配慮した。そして最終的には、事前に各自が調べたそれぞれの教育機関の目的を意識しつつ、実際に教えている先生方、そして学んでいる子ども・生徒を観察し、自分の設定したテーマにそって理解したことをまとめる時間を保証した。これらの工夫により、限られた時間と場面での観察実習という現在実施している方法の弱点を可能な限り補いつつ、受講学生の学びを最大限促進することができると考えた。

2. 研究方法

2-1. 実践対象

1 年生前期に開講される、初年度ゼミ「ふれあい実習Ⅰ」の受講学生である。筆者は、保育・初等教育専修の学生 22 名を担当した。

2-2. 授業の進め方

表 1 に、2013 年度の授業の流れを前期分中心にまとめた。18 回分の時間を用い、大学附属の 4 教育施設（幼稚園・小学校・中学校・高校）を順に見学し、その後、討論の時間が用意されている。これを 4 回繰り返し、最後に発表会を行い終了という流れになっている。発表会では、学生一人ひとりが 4 回にわたる見学実習から学んだことなどを報告した（なお、この授業には新入生が早く大学生活になれるような内容も含まれている）。

表 1. 2013 年度「ふれあい実習」の流れ

回数	授業日	内 容
1	4/5	新入生ガイダンス（保初専修＋初中専修）
2	4/9	クラス交流会（バレーボール実施）
3	4/9	クラス交流会（バレーボール実施）
4	4/9	実習指導ガイダンス（保育初等教育専修と初等中等教育専修で別）
5	4/23	高校での見学実習準備作業
6	4/30	高校での見学実習
7	5/7	高校での見学実習について討論・発表、まとめ（施設調べ）完成
8	5/7	中学校での見学実習準備作業
9	5/14	中学校での見学実習
10	5/21	中学校での見学実習について討論・発表、まとめ（施設調べ）完成
11	5/21	図書館および歴史館ツアー
12	5/28	幼稚園での見学実習準備作業
13	5/28	小学校での見学実習準備作業
14	6/4	幼稚園での見学実習
15	6/11	小学校での見学実習
16	6/18	幼稚園での見学実習について討論、まとめ（施設調べ）完成 小学校での見学実習について討論、まとめ（施設調べ）完成
17	6/25	幼稚園と小学校のまとめの発表会
18	7/9	実習全体のまとめの作業
	2/17	附属幼稚園での事前指導
	2/24	プレ実習
	2/25	プレ実習
	2/27	プレ実習
	2/28	プレ実習

事前学習として「施設調べ」を課すことは、第4回目の授業で伝えた。その際、準備をすることの大変さに理解を示しつつ、しかし何事も準備あってこそ、短い時間の学校等見学がより意義のあるものになることを、社会心理学者 Festinger（1960）の認知的不協和理論（Foss, 1972）に基づいて説明した。これは「人は自分自身の中にある矛盾する認知の不協和を低減させることができると思うような情報を求め、不協和を増加させると思われるような情報を避ける」というものである。つまり学生の心に、「短い時間の学校等見学はあまり意味がない」という認知が生じた時に、教員から与えられた「しっかりと準備をすれば学ぶことも多い」という情報による別の認知が生じると、この二つの認知の間に不協和が起こる。不協和理論によれば、学生は、あまり意味がないという認知を低減させ、大変な状況の中でしっかりと準備すれば学ぶことも多くなるという認知を増大させることで矛盾を解消できるよう、態度を変化させることになるというわけである。

今年度の変更点は次の3点である。第一は、学生の課題作成における負担の軽減である。今年度は、「施設調べ」を作成する代わりに、これまで課題としてあった「観察記録」と「実習の記録」は提出しなくてよいこととし、学生の負担の軽減を行った。ここで「施設調べ」を最も重視した理由は、保育者を目指す学生にとって、「施設調べ」が、先にも述べたように一人ひとりが自分の主体性を最も発揮しやすい仕組みを備え、かつ将来保育者・教育者を目指すものにとって、その資質を高めるには、とてもよい学び・訓練の機会を用意していると考えからであり、その効果は今回のアンケート調査結果にも表れている。

第二は、施設（学校）見学の視点の明確化である。今年度は特に、発達の視点を見学のテーマの一つにするように指示した（表2.1）。以前『『施設調べ』は実習時間の短さと、授業のみを見るところから、あまりやって良かったと思えるほどの成果を感じない。』や「幼稚園については、意味があったと思うが、小、中、高については無意味なのではないかと疑問に思うこともあった。」という学生の意見に応え、服部（2012）においてすでに基本的な考えを述べたように、「施設調べ」をすることの意義について、これまで以上に丁寧な説明を行った。さらに「観察実習における自分のテーマの設定の際に、必ず、子どもを発達的にとらえてみる視点を含むテーマをひとつ設定すること」を「施設調べ」の様式に明記し、学生自身にそのような観察の視点を十分に意識させる一方で、それに関する学生の思いを自由に、また主体的に表現できる場を提供した。筆者は、「学びの主体性」を大切にすることは、逆説的な言い方ではあるが、それが発揮できるような枠組みをきちんと整えておくことであると考えている。そのため、例えば、受講学生が将来、高校や中学校で教えることは念頭になく、幼稚園・保育園あるいは小学校で保育・教育することを考えている場合でも、自分たちが保育・教育する年齢の子どもたちが、将来、中学校や高校においてどのような姿で生活し学習しているかを知っておくことが必要であること、また反対に、中学校や高校での児童・生徒の姿を直に観察しておくこと、さらにそこで教育さ

れている先生方の姿を観察させていただくことの重要性を説明した。この際、心理学を専攻した筆者の頭の中にあったものは、Erikson（1963）の心理社会的発達段階説である。発達の著しい子どもたちの保育・教育を考える際には、Erikson の発達段階説にもあるように、発達の連続性を意識すること、つまり現在の子どもの課題について考えるとすれば、必ずその子どもの生育歴および置かれた環境を考慮し、かつ将来への見通しを立てて考えること、が大切である。つまり子どもから大人へという、連続した発達の流れの中で、自分が関わる一時期を理解し、その時期に将来を見据えた実践をする必要があること、そのためには幼稚園・小学校・中学校・高校のすべてを見学しておくことが極めて有効であることを機会があるごとに説明した。

第三には、「施設調べ」の枠組みの中の「討論の意義」についてさらに検討したいということで、アンケートの項目に「討論」を加え、すべての見学実習を終えた段階で、討論をすることの意義について受講学生に確認したことである。学生には、服部（2012）で用いられた項目に若干の加筆等変更を加えた「施設調べ」の様式（A3 用紙両面）を配布した（表 2）。変更した部分（裏面）は下線で示した。変更の理由は先に説明した通りである。

表 2.1. 学生に配布した「施設調べ」の様式（表面）

- 1 訪問先の実習機関に関する事前調べ
- 2 見学に関する注意事項等の事前調べ
- 3 見学の際の観察の視点と記録の書き方についての事前調べ
- 4 今回の観察実習における自分のテーマの設定（必ず、子どもを発達的にとらえてみる視点を含むテーマをひとつは設定すること）

表 2.2. 学生に配布した「施設調べ」の様式（裏面）

- 1 訪問先の実習機関に関する情報、注意点、観察の視点と記録の書き方について事前に調べたことによって学べたこと
- 2 自分のテーマについて学べたこと
 - 2-1 「今回の見学実習で生徒の様子を観察して、良い点や気になる点があったか、又、自分が保育・教育場面で教えるときにどのような点を大切にしたいと感じたか」などについて記述しなさい
 - 2-2 今回の見学実習の授業の中で、自分が担任であったら
 - ① 活用したいと思ったこと
 - ② 自分が先生であれば、①であげたことについて、「○○のような工夫をして、生徒たちに□□が学べるようにしたい。その理由は△△である。」と説明する
 - ③ 上の②で述べたことで、「今回の見学実習の場における生徒の姿から、自分が教える立場に立った時、特にどのようなことに力を入れたいか」などについて自由に意見を述べなさい
- 3 観察実習を終えての感想
- 4 実習訪問した次の週に予定されている討論、具体的には、グループ討論や全体の場での発表・意見交換等を通じて発見したこと、学んだこと

2-3. 学習効果の評価方法

本実践の効果については、授業の最後に実施した授業アンケート（一部加筆した部分は下線で示した）を軸に、補足的に、学生の作成した「施設調べ」の内容も参考にして評価した。アンケートの内容は以下の通りである（表3）。

表3. 本実践の効果を評価するために用いたアンケートの内容

「ふれあい実習Ⅰ」（平成25年度前期）授業アンケート

平成25年6月25日（火）担当教員 服部 次郎

今回の「ふれあい実習Ⅰ」において、4か所の見学実習機関を見学実習するにあたって、事前に「施設調べ」を作成してもらいました。時間はかかったと思いますが、これまでの教員の経験から必ず役に立つものと思い、実施いたしました。学生の皆さんの率直な意見・感想をお願いいたします。

問1 役に立った程度について尋ねます（最も近い数字に○をつけてください）。

5	4	3	2	1
とても	ある程度	どちらとも	あまり役に	ほとんど
役にたった	役にたった	いえない	立たなかった	役にたたなかった

問2 その理由は何ですか。自由に記述してください。

問3（問1で5、4と答えた方に尋ねます）既に問2で答えていただいたかもしれませんが、どのような内容が、どういう理由で、自分の学びに役立ったか、より詳しく説明してください。

問4 「施設調べ」の裏も完成させてみて、このような作業をすることは自分の専門家としての資質を高めるのにどのように役に立つと思われるか、自由に意見を述べてください。

問5 この授業で4か所の教育機関を見学実習しました。今このことを振り返ってみて、感じたこと、学んだこと、その他どのようなことでも結構ですので、あなたの意見・感想等を自由に記述してください。特に、自分が将来働く場で出会う児童の発達を考える際に、他の年齢層の児童の授業等を見学したこと、またそのための調べをし、討論・まとめの作業をしたことはどの程度、またどのように役に立ったかできるだけ詳しく述べてください。

○協力ありがとうございました。

（注）「施設調べ」については後輩学生のためや、私の授業改善研究の資料として活用させていただく予定です（名前は出ません）が、それは困るという方がおられましたらお知らせください。

（注）このアンケートも含めて、すべての個人課題（4回の施設調べ）とグループと討論記録を総合して評価をします。締め切りは、7月9日（火）です。

3. 結果

まずアンケート結果について報告する。今回も、「施設調べ」が役に立った程度について尋ねたところ（問1）、全受講学生22名中、8名が「とても役に立った」、13名が「ある程度役に立った」、1名が「どちらともいえない」と回答した。「どちらともいえない」と答えた学生1名も、アンケートへの具体的な記述（例えば問4）を見ると、「自分の考えを整理したり、観察したことを振り返ることで、自分がどのような教師になりたいかや、年齢別の発達的な視点で見たりするところで役に立ちそうだなと感じました。」と答え、「役に立つ」ことは認めた上で、「どちらともいえない」と答えた理由は、「（この課題をするのは）私たちのクラスだけということですこし不満に思うこともあったから。」というものであった。この結果、22名全員が「施設調べ」は「役に立った」と評価しており、この課題をすることの意義を認めていると解釈できる。

「学びの主体性」を大切にすることは、逆説的な言い方ではあるが、それが発揮できるような枠組みをきちんと整えておくことであると先に説明した。その枠組みのひとつとして、筆者は「施設調べ」を活用してきた。これまでも述べてきたように、主体的学びにとって重要な概念は、内発的および外発的動機付けであるため、この主体的学びがなされているかどうかの基準として、アンケート調査で得た「施設調べが役に立ったかどうか」の程度を活用した。つまり、学びの主体性を高める上で「調べ」をすることが自分の学びにとって「役に立ったかどうか」という問いに対する実習生の評価を基準とした。

ただしアンケート調査での今年度22人の学生は、昨年度・一昨年度とは別の対象者であるため、単純な比較はできないと考えている。ここにそれぞれの年度における参加学生の「施設調べ」に対する評価結果とその平均値をあげておく（表4）。

表4. アンケート調査から得た「施設調べ」が役に立った程度に関する評価（5段階評価）

	5	4	3	2	1	平均値
2011 年 (20 名)		13	5		1	3.4
2012 年 (20 名)	14	5	1			4.7
2013 年 (22 名)	8	13	1			4.3

次に「施設調べ」が役に立ったと評価した学生が具体的に記述した内容は、表 5.1 に示した。今回は特に 4 教育施設を見学実習する意義の明確化（「発達の視点」の導入）を図ったが、その結果については全受講学生の記述を表 5.2.1 にまとめ、さらにその内容をいくつかの項目に分類した（表 5.2.2）。例えば、「自分が将来働く場で出会う児童を見るだけでなく、各年齢の子どもたちを見ることで、小さいときの指導や教育、生活がどのように大きくなっていくときに影響していくのか、子どもの性格や態度がどのように変わっていくのかを見ることや考えることができました。年齢によって接し方をどのように変えていかなければいけないかを知ることができ、先生たちのすごさもわかりました。」という記述から、子どもの発達を長期的な視点で捉え、接することの大切さや現場の先生方の役割の重要性を受講学生が実感していると解釈し、それぞれの項目に分類した。最後に、「討論すること」の意義についての記述は、表 5.3 に示した。自分の視野が広がり、有益な情報の共有もできたようである。

表 5.1. 「施設調べ」の価値を認めた学生が問 2, 3 に対して記述した内容の例

- ①（問 1）事前調べでは、実習するところがどういうところなのか、教育方針はどのようなのかということを知って、自分のテーマや観察するポイントをつくれるので観察の際、漠然としたものでなく、自分のテーマに沿い、深いところまで見えるので良いと思いました。事後では、事前調べにより、自分のテーマにあったポイントが見られたかや観察の際の反省、また次の観察実習の際、どういうところを比較してポイントをおくかと、次につなげられて、とても良いと思いました。（問 3）事後では、皆と討論をすることにより、自分の偏った考えで、このところはこういうふうなんだ、この年の子はこうなんだ、と決めつけずに、こういう子もいるといった広い視野でみれてすごく役立ったと思います。みんなの考えた意見を取り混ぜて、深いところまで追求できるし、意見交換もできてすごく良かった。
- ②（問 2）まず学校の歴史や成り立ち、教育目標などを調べることで、子どもたちがどのような環境におかれているか、理解することができた。また、1 日の流れについて調べることで、今、どのような時間なのか、子どもたちはどんな注意をするかなど、よく理解して観察することができ、事前学習をしないよりも、多くのことを学べたと思うから。（問 3）上記に記載した通り、学校の成り立ちや教育目標などをしらべることで、子どもたちがおかれている環境を理解して観察したり、1 日の活動の流れを踏まえた観察をすることで、…見たのは部分的だが、全体について想像しながら見学できたから。
- ③（問 3）高校から中・幼・小と見学していったので、発達の視点で見るのは難しかったけれど、事前に自分の観察したい点を決めて行くことで観察がしやすかったし、事後では見学して終わりではなく、見学したときの様子や感じたこ

とを整理することで、実習をして学べたことを確認することができたからです。(問3) 観察の視点と記録の書き方や自分のテーマを考えて行くことで、見学する時にどこに注目して見ればよいかなどを効率的に観察できたので、自分が知りたいことをしっかりと知れるという点でとても役に立ったと思います。

- ④ (問2) その学校の教育方針やどんな特色のある授業をしているかなどについて事前に調べることで、漠然としたイメージをかためることができた。またテーマを事前に設定することで、観察をするときに、テーマを念頭において充実した観察ができた。(問3) 例えば、テーマを設定せずに観察していたら、ただ授業を見ただけで終わってしまうが、テーマを設定したおかげで充実した観察ができた。子どもの幼稚園、小学校、中学校、高校における発達を見る上で、事前にテーマを設定し、ある程度情報を集めて置くことで、当日何に重点を置いて見ればよいかなど心の準備ができ、モチベーションを上げることができたから、とてもよかった。
- ⑤ (問2) 幼稚園は、小・中・高と「教育する」という面や、カリキュラムなどが全然違うので、小・中・高と同じ感じではダメであることが事前にわかったため、テーマを決めておくことによって、自分のテーマを重点的に観察でき、何もかもが漠然的にならなくてよかったため。(問3) テーマを決めるということで、幼・小・中・高で同じテーマを決め、年齢によってどのようにその部分が変わっていくか、発達していくかをしっかりと見ることができ、観察中に何を見ていいかわからなくなったり、何を見るか考えることをせずに観察にのぞめたのでよかったと思います。また、絵を描いたり、カラフルに作ることで、将来掲示物を作るときの練習になってよかったと思います。
- ⑥ (問2) その学校の目標や方針、視点、テーマなどを調べたり、あらかじめ考えておくことで、そこを中心に見れたから。注意事項を書き出すことで頭の片すみにおくことができたし、実習の前日に見直して、実習に向けての気持ちが整理できたから。(問3) 問2でも書いたのですが、例えば、視点で「教師の授業に対する工夫と目的を見つける」と書いて、実習で教師の授業の進め方、話し方、を中心に見ることができた。また、その施設の事前調べで必ず教育方針や目標を調べて、教師の授業がその目標を達成するためにどのように工夫されているか見ることができた。

表 5.2.1. 「施設調べ」を完成させた学生（22 名）が問 5 の「発達の視点」に関して記述した内容

1. 子どもの発達は連続したつながりを持っているため、を長期的な視点で捉え、子どもに接することが大切であるとする意見

- ・ 今回の観察実習を通して、様々な年齢層の授業を見学したことによって、子どもの教育を長期的な目標で捉えることができ、それぞれの年齢の子どもはどのような接し方をするとどのような反応をするかについて知ることができた。
- ・ 年を重ねるにつれて積極性、勉強への関心がなくなっているなど思いました。…
- ・ まず 4 施設に行って、今まで自分が持っていたイメージとちがったので驚いた。年齢が上がるにつれて集中していくのかと思っていたが、集中しているのではなく静かになるだけで、実際高校よりも幼稚園の方が一生懸命で集中していたと思う。
- ・ 4 つの施設見学を終えて、私は先生の教え方についてテーマを置きました。幼稚園や小学校では子どもたちの主体性や積極性を引き出そうとするのに対し、中学校・高校では自主自立を育てようとしているように感じました。
- ・ 4 か所見学に行き、私は全てが別々ではなく、成長の過程としてつながっていることに気付くことができました。高校できちんと授業についていけるように、中学校では基礎を固めておくこと、そのために小学校で勉強をする姿勢を身につけること、小学校でみんなで一つのことをするために、幼稚園でマナーを教わること、全て積み上げだということが分かり、小学校の先生になったら、ある程度厳しく、良いことと悪いことの区別をつけてあげたいです。自分が先生になった時に、活用したいことなどをメモしました…。
- ・ もし自分が小学校で働いていたとしたら、幼稚園で培ってきた積極性をこわさず、常に好奇心をもった何ごとにもチャレンジしていく精神をなくさずに中学にあがれるような支援（例えば、子どもたちの自主性と協調性のバランスをうまくとれるような授業：いつもは口々に発言して、自分たちの言いたいことを発言させる。でも時々、挙手制にして、人が話している時は自分の話したい気持ちや少しは抑えて話を聞くんだよとわからせる）をしていきたいと思った。
- ・ 幼稚園では先生が指示を出して、幼児がそれに従って助けてもらいながら動き、小学校では先生の指示も幼稚園に比べると減り、自分のことはだいたい自分でできるようになり、中学校では中学 1 年の初めはまだ少し先生の指示を仰いだりするものの、学年があがるにつれて自分で判断をするようになり、落ち着いてきて、高校では自分が考えて行動するという自己責任が大きくなる。このように大きくなるにつれて自立の心が発達してくるという特徴があると思いました。
- ・ 学年によって過不足があることが一番学べたと思う。例えば、言われてからや

ることが減るにつれて、主体性がなくなったり、自主性が減って協調性が増えていったりと良い所も悪い所も各学年によってあるなと改めて実感した。

2. 乳幼児期における保育・教育の大切さを実感したと考えられる意見

- ・私は、幼稚園、小学校、中学校、そして高校と、子どもたちを見てきて、本当に幼稚園での教育は大切だと感じた。
- ・学習前までは各年齢ごとに「だいたいこんな感じだろうな」と思っていたことでも実際に観察してみると全く違っていたこともあったので、思い込みだけで判断してはいけないと思いました。また、年齢があがっていくにつれて授業への態度が悪くなっていく傾向があったので、自分が担当する幼児・児童期の中に少しでも長く集中力を続けさせたりできるといいなと思っています。
- ・自分が保育・教育をする時には、成長後の中学・高校のことも考えて、今回の見学で逸脱行為をしていた子どもにならないように小さいころからのしつけを徹底させたいと思った。
- ・先生はとても重要であることに気付いた。小さい時にしっかり生活の基礎について先生が教える事で、将来きちんと自分の事ができる子になるのではないかなと思った。だから、幼稚園の先生は基礎を教え込んで、できたら褒めてあげるべきだと思った。子どもをその時の状態だけを見て指導するのではなく、発達していくのだから、将来の事も考えて、子どもと関わっていくのが良いと感じた。
- ・成長しても変わらずに積極的に授業に参加してくれるには、小さいころから沢山ほめて、その子の個性を伸ばすことが大切だと学び、自分が教育現場に立った際にはぜひ活用していきたい。

3. 発達課題とそれを成功に導く環境作りの大切さを感じたと考えられる意見

- ・4つの段階を見ることによって、段階を比較することができた。私の場合は生徒の集中力を見ていたのですが、幼稚園児が一番集中できないと思ったけれど、比較すると、遊びに関してはすごく集中していて、小学生より集中できているのではないかなと思った。4つの段階で共通して、自分の興味があることにはすごく集中していて、逆につまらないと思うと全然集中できないので、興味をもたせる工夫のある授業をしようと思った。
- ・4つの施設を見学し、まとめることで、先生と生徒の関わりが、年齢が上がるにしたがってうすくなっていることが分かった。また、幼稚園、小学校、中学校、高校で私が見学させていただいた4人のどの先生も…生徒がその授業及び活動に興味が待てるように工夫しておられたことも分かった。…幼稚園生は発達初期にあるから、その点も工夫しつつ、遊びながら多くのことを学べる活動方法で活動できるような先生になりたい。
- ・4つの施設実習を通し、私は生徒の発達段階と先生と生徒の関わりについて学

びました。幼稚園・小学校は好奇心のある子どもたちなので積極性は自然と身に付いており、その積極性を生かして先生たちはサポートし、自主性を伸ばすような工夫が見られました。

- ・4つの施設を観察して、まずあいさつを取り入れたいと思いました。…そうゆうのは、親や先生がすることにより子どもも真似をしていき、あいさつを自分からすることによって、積極性もひきだせると思いました。
- ・私は、幼稚園から高校まで観察して、子どもの積極性、自主性の発達と、それにおける教師の関わりについて学ぶことが出来た。幼稚園から高校と発達していくにつれて子どもの積極性、自主性は失われていっているように感じた。また、仮に子どもが一定の積極性、自主性をもっている、それを表現する場が減っているのではないかと考えた。自分が仮に幼稚園で働くとしたら、まず第一に子どもの意欲や好奇心を壊すことがないように、むしろ子どもが積極的に興味をもてるような環境づくりをしようと思う。小学校から高校では、幼稚園と異なり、集団での活動が多くなってくる場なので、子どもがどのように発達していくか、また発達してほしいかを想定し、保育していこうと思う。このような考えに至るにはふれあい実習で他の年齢層の子どもを見学することは必要だと思う…。
- ・4か所の教育機関を観察して、年を重ねるごとに積極性が失われていくと気づくことができた。これはほめる回数や機会の減少が原因ではないかと思い、自分が将来働く場で出会う児童たちにはたくさんほめて、長所やその子のもっている力をのばしてあげようと思った。

4. 現場の先生という役割の重要性に関する意見

- ・自分が将来働く場で出会う児童を見るだけでなく、各年齢の子どもたちを見ることで、小さいときの指導や教育、生活がどのように大きくなっていくのときに影響していくのか、子どもの性格や態度がどのように変わっていくのかを見ることや考えることができました。年齢によって接し方をどのように変えていかなければいけないかを知ることでもでき、先生たちのすごさもわかりました。

5. 将来、保育・教育に関わる仕事をしたいという意識の高まりや心構えの構築

- ・4か所の実習を通して、自分が目指している職の責任の重さを痛感したが、自分が子どもの土台を作ってあげたいという新しい感情も芽生えた。
- ・自分が考えていた幼稚園児、小学生、中学生、高校生とは結構違うところもあり、またそれにおける教師の関わり方などは自分が教師を目指す上でとても参考になりました。…いろいろな視点から子どもの発達について考えることができました。

(注) 受講学生全員から出された意見について筆者が分類したものである。

表 5.2.2. 「発達の視点」で記述された受講学生の意見を分類した結果

受講学生 22 名の意見の主なもの（複数回答あり）	人数	割合
1. 子どもの発達は連続したつながりを持っており、長期的な視点で捉え、接することが大切とするもの	17	77%
2. 将来、自分が保育・教育に関わる仕事をしたいという意識の高まりや、その心構えに関するもの	11	50%
3. 乳幼児期における保育・教育の重要性を実感したというもの	6	27%
4. 発達課題とそれを成功に導く環境作りの大切さを感じたというもの	6	27%
5. 現場の先生の役割の重要性に関するもの	6	27%

表 5.3. 「施設調べ」の完成に対して価値を認めた学生が問 5 に対して記述した内容

- ・自分が将来働く場で出会う児童を見るだけでなく、各年齢の子どもたちを見ることで、小さいときの指導や教育、生活がどのように大きくなっていくときに影響していくのか、子どもの性格や態度がどのように変わっていくのかを見ることや考えることができました。年齢によって接し方をどのように変えていかなければいけないかを知ることができ、先生たちのすごさもわかりました。討論・まとめをしたことで自分が思っていたことと違うことを思っている人や、自分が気づいていないことに気づけている人もいて、たくさんのことを学ぶことができました。
- ・今回の観察実習を通して、様々な年齢層の授業を見学したことによって、子どもの教育を長期的な目標で捉えることができ、それぞれの年齢の子どもはどのような接し方をするとどのような反応をするかについて知ることができた。また、討論やまとめ作業をしたことによって、その経験を濃密なものにすることができ、他のグループからは自分が調べきれなかった様々な視点からの意見を取り入れることができた。
- ・私は、幼稚園、小学校、中学校、そして高校と、子どもたちを見てきて、本当に幼稚園での教育は大切だと感じた。まとめをし、討論をしたことによって、いろんな子どもたちのことや、教育方法を知ることができたので、今後、どんな教育が良いのかを考えていきたい。そして、私は保育者を目指しているので、保育の現場で、その子たちの将来の発達も考えて、今、してあげべきことをしてあげたいと感じた。
- ・4つの段階を見ることによって、段階を比較することができた。私の場合は生徒の集中力を見ていたのですが、幼稚園児は一番集中できないと思ったけれ

ど、比較すると、遊びに関してはすごく集中していて、小学生より集中できているのではないかと思った。4つの段階で共通して、自分の興味があることにすごく集中していて、逆につまらないと思うと全然集中できないので、興味をもたせる工夫のある授業をしようと思った。討論をしたことで、全学年の意見をきいて、より細かい成長を見ることができた。作ったまとめは今後見返して、自分が保育するときどのようなことに気をつけるか考える時に活かしたい。

- ・4か所見学に行き、私は全てが別々ではなく、成長の過程としてつながっていることに気付くことができました。高校できちんと授業についていけるように、中学校では基礎を固めておくこと、そのために小学校で勉強をする姿勢を身につけること、小学校でみんなで一つのことをするために、幼稚園でマナーを教わること、全て積み上げだということが分かり、小学校の先生になったら、ある程度厳しく、良いことと悪いことの区別をつけてあげたいです。自分が先生になった時に、活用したいことなどをメモしましたが、討論をして、他の人が気づいたことも使えることがたくさんあったので、意見交換が出来て良かったです。
- ・年を重ねるにつれて積極性、勉強への関心がなくなっているなと思いました。…討論・まとめをすることで自分が見ていない学年やクラスのことが聞けるのでとても役に立ちました。
- ・学習前までは各年齢ごとに「だいたいこんな感じだろうな」と思っていたことでも実際に観察してみると全く違っていたこともあったので、思い込みだけで判断してはいけないと思いました。また、年齢があがっていくにつれて授業への態度が悪くなっていく傾向があったので、自分が担当する幼児・児童期の中に少しでも長く集中力を続けさせたりできるといいなと思っています。そして、討論をしてまとめを行ったことで自分が気づかなかったことに気づけて、さらに視野を広げることができたので、とても良い機会だったと思います。
- ・私は、幼稚園から高校まで観察して、子どもの積極性、自主性の発達と、それにおける教師の関わりについて学ぶことが出来た。幼稚園から高校と発達していくにつれて子どもの積極性、自主性は失われていっているように感じた。また、仮に子どもが一定の積極性、自主性をもっている、それを表現する場が減っているのではないかと思った。自分が仮に幼稚園で働くとしたら、まず第一に子どもの意欲や好奇心を壊すことがないように、むしろ子どもが積極的に興味をもてるような環境づくりをしようと思う。小学校から高校では、幼稚園と異なり、集団での活動が多くなってくる場なので、子どもがどのように発達していくか、また発達してほしいかを想定し、保育していこうと思う。このような考えに至るにはふれあい実習で他の年齢層の子どもを見学することは必要だと思うし、調べ、討論、まとめをすることで、自分の考えの幅を広げることが出来たので、今後の実習を考える上で、とても役に立った。

- ・まず4施設に行って、今まで自分が持っていたイメージとちがったので驚いた。年齢が上がるにつれて集中していきのかと思っていたが、集中しているのではなく静かになるだけで、実際高校よりも幼稚園の方が一生懸命で集中していたと思う。調べをしたことは、本当に良かったと思う。何も知らないで行っても、あまり意味がないような気がした。討論は、他のクラスのことも聞けて、自分が見たクラスだけでこの学年はこういうものだと思いつけてしまいそうだったが、それを防ぐことができた。まとめは、まとめることで、まとめる力もつくし、さきほども書いたが、あったことを再確認し、そこで疑問に思ったことをこれからの課題にしていこうとも思えた。
- ・もし自分が小学校で働いていたとしたら、幼稚園で培ってきた積極性をこわさず、常に好奇心をもった何ごとにもチャレンジしていく精神をなくさずに中学にあがれるような支援（例えば、子どもたちの自主性と協調性のバランスをうまくとれるような授業：いつもは口々に発言して、自分たちの言いたいことを発言させる。でも時々、挙手制にして、人が話している時は自分の話したい気持ちや少しは抑えて話を聞くんだよとわからせる）をしていきたいと思った。討論することは、自分の見たものだけで、変な固定観念をもつことを修正してくれる大切なものだと思うので、これから先生になっていく私たちにとって役に立ちました。
- ・4か所の教育機関を観察して、年を重ねるごとに積極性が失われていくと気づくことができた。これはほめる回数や機会の減少が原因ではないかと思い、自分が将来働く場に出会う児童たちにはたくさんほめて、長所やその子のもっている力をのばしていったらいいと思った。今回討論をしてみて、私の一方的な考え方だけでなく、他の子の意見や考え方を聞いて、なるほどこういう考え方もあるのだと視野を広げることができた。また、問題点などを話し合っていて、新たな工夫や今まで自分が受けてきたよい授業方法なども共有できた。

4. 考 察

主体的学びがなされているかどうかの基準として、先に述べたようにアンケート調査における「施設調べ」の「役に立った程度」をもって、主体的学びが促進されたと解釈したが、結果として22名の全受講学生が「役に立った」と回答した。筆者の当初の予想は正しかったと考えるが、その理由をここでは明らかにしておきたい。

まずは、「施設調べ」という枠組みを与えられることで、全ての受講学生は「調べ学習」に取り組むこととなる。この時点においては、必ずしも全員が主体的・自発的にこの調べ学習に取り組んでいるとはいえない。しかし、調べ学習をした上で見学実習先に出向いて行った結果、ひとつの例ではあるが、受講学生は次のような感想を抱くことになった。「見学実習先がどういうところか、教育方針はどのようなものかとい

うことをあらかじめ理解し、自分のテーマや観察するポイントを明確化してあったことで、自分のテーマに沿い、深いところまで見え、理解できた」という感想である。「施設調べ」において、事前に情報収集し、見学のテーマや観察のポイントを設定することによって、限られた時間と場所においても効率的で、きめ細かい観察が可能となり、結果として理解が一層深まり、見学の目的達成に近づくことができ、「調べ学習は役に立つ」と実感できたと考えられる。このように実感できたことによって、次の「調べ学習」をすることに対する内発的動機は高まり、筆者の重視する「学びの主体性」が強まると考えられる。さらに、この受講学生のことばによれば、「見学実習後の授業において、事前調べで設定した自分のテーマに関する観察がきちんとできたかを確認したり、観察の際に何か反省すべき点がなかったかなどの『振り返り』をしたりすることで、次の観察実習の際、どういう点に注意を払うべきかという心構えもでき、次の見学実習につなげられる」と述べている。さらに続けて「事後指導において、他の学生と討論をすることにより、自分の偏った考えで決めつけずに、広い視野で考えることができたり、他の学生の意見を取り混ぜて、深いところまで追求できたりする」というこの学生の認識は、「討論」することの意義を実感できたという意味でもきわめて重要である。表 5.3 の中では、他にも、「討論したことによって、いろんな子どもたちのことや、教育方法を知ることができたので、今後、どんな教育が良いのか考えていきたい。」や、「討論することで、自分が見ていない学年やクラスのことを聞けるのでとても役に立ちました。」というものがあつた。特に最後の意見は、本学の見学実習の弱点、すなわち限られた時間の中で、教育機関の一部の学年やクラスを見学するという設定を考慮すると極めて重要な指摘であり、それ故に、「振り返り」や「討論」の時間が必要であり、かつそれを積み上げていくことで学生の主体的学びが促進されるともいえる。

この点は、鈴木（2006）の研究における「観察演習プログラム」の教育的意義の中で述べられている「複数の演習と振り返りを地道に繰り返すことで、教員の指導だけでなく『学生同士の自主的な気づき』の元で学ぶことができたと考えられる。受動的な学習ではなく主体的な学習を行うことでより充実した学習成果が得られたと考えられる。」という主張に通ずるものがあると考えられる。

さらに、柏崎（2012）の「ある課題について自ら体験や調査によって学習した場合、そこで知り得たことをいかにまとめるかだけでなく、調べ学習を通じて自分がいかに考えたかに焦点を当てる指導が重要であり、主体的な学びの成果をいかに言語化するかに、目を向けるべきである。」という主張にもつながるものであり、「学びの主体性」を促進することを考える上で、「討論すること」、別の言い方をすれば、「学びの成果の言語化の過程」の重要性が確認できたともいえる。

次に、「発達の視点」について、これを意識して保育・教育にあたるのが専門的職業を目指している受講学生にとっては必須であることを筆者はこれまでも強調してきた。今回の施設調べにおけるテーマのひとつとして「発達の視点のテーマを設定す

る」よう指導したが、その意義を受講学生がいろいろな観点から感じることができたことも、やはり「施設調べ」という枠組みと其中での小さな工夫、すなわち「発達の視点」というテーマを見学実習の目的の中に導入し、受講学生に意識化させたことによる成果であると解釈する。

「テーマを決めるということで、幼・小・中・高で同じテーマを決め、年齢によってどのようにその部分が変わっていくか、発達していくかをしっかりと見ることで、観察中に何を見ていいかわからなくなったりせずに観察にのぞめたのでよかった」という受講学生の記述にもその一端が読み取れるが、受講学生の興味・関心も当然のことながら多種多様と考えられるため、どのような観点で、全受講学生が興味・関心を抱いたかを明らかにしておきたい。

見学実習と本実習という違いはあるが、奥ほか（2009）による論文でも取り上げられた発達段階への深い理解の必要性の認識は、短大における2年生62名が5月の保育所実習後にアンケート調査における結果においても言及されていた。全体の20%の学生が、実習後の心境の変化として必要性を感じたと記述されていた。これと関連して考えるならば、本学の本実習前の見学実習において、77%の1年生の学生が「子どもの発達は連続したつながりを持つため、長期的な視点で捉え、接することが重要である」との認識を持てたことは、2年次に本実習を行うことを考えると、極めて効果的な学びができたものと解釈でき、見学実習の意義のひとつとして評価できる。

さらに、奥ほか（2009）の同じアンケート調査で、12%の学生が「保育者になりたいと強く思った」とあるが、これについても本学の50%の受講学生が、「将来、自分が保育・教育に関わる仕事がしたい」という意識の高まりや、その心構えに関する思い」を述べており、現場での実習あるいは見学実習がキャリア教育的効果（奥ほか、2009）を持つことの証拠でもあると考えられる。

発達の視点に関する、その他の重要な項目としては、乳幼児期における保育・教育の重要性を実感できたこと（27%）、発達課題とそれを成功に導く環境作りの大切さを感じることができたこと（27%）、そして現場の先生の役割の重要性を認識できたこと（27%）、などがあげられた。これらも、他の項目に劣らず大切で、4教育施設を連続して見学実習できたことによる成果と考えられる。

最後に「役に立った」という観点から、もうひとつ忘れてはならない受講学生の発言がある。それは、保育者の資質のひとつとして求められる表現力を養成する上でも、「施設調べ」が役に立ったということである。その学生は、「絵を描いたり、カラフルに作ることによって、将来（保育・教育現場で）掲示物を作るときの練習になってよかったと思います。」と述べている。この種の思いは服部（2012）においても多くの学生が感じていたことであり、十分に理解できるものである。以上のように、アンケート調査等で得られた結果により、今回の実践研究の主な目的について検証できたものとする。

4. 謝 辞

本研究をまとめるにあたり、極めて忙しい中で、原稿を査読いただき、適切な助言・指導をいただいた本学教育学部准教授の野崎健太郎博士に対し、こころより感謝いたします。また、授業において、本研究を進める上で協力をしていただいた学生の方々、そして学生に見学実習の機会を与えてくださった4教育機関(施設)の関係者の方々、さらに掲載資料にある名前の使用についても快く了解くださった先生方にもお礼を申しあげたいと思います。

■引用文献

- Erikson, E. H. : Childhood and Society, Norton, p. 247-274, 1963 年.
- Foss, B. M. : New Horizons in Psychology 1, Pelican Book, p. 386, 1972 年.
- 服部次郎・谷田貝雅典：保育実習（施設）の意義について—実習を終えた学生のアンケートから見えてくるもの—。岡崎女子短期大学研究紀要，第 43 号，p. 47-54，2010 年.
- 服部次郎：保育者・教師養成課程における初年次教育としての施設（学校）見学を充実させる事前学習の実践—学生が主体的に学ぶことを目指した「施設調べ」の試み—。相山女学園大学教育学部紀要，第 5 号，p. 147-164，2012 年.
- 柏崎秀子：教職課程における主体的な学びと言語力育成—ポートフォリオによる自己評価の変容—。実践女子大学文学部紀要，第 54 集，p. 35-44，2012 年.
- 中津愛子ほか：保育所実習の事前指導における保育所見学観察実習。保育士養成研究，第 25 号 p. 19-25，2007 年.
- 奥明子ほか：保育者を志す学生の保育所実習前後の意識変化—保育所実習に関する学生へのアンケート調査から—保育士養成研究，第 27 号，p. 45-54，2009 年.
- 須藤康恵ほか：“ケース検討形式”を中心とした実習事後指導のあり方に関する一考察。保育士養成研究，第 27 号，p. 65-72，2009 年.
- 鈴木大介：実践教育導入期における『観察演習プログラム』の有用性—保育士養成教育における取り組み—。保育士養成研究，第 24 号，p. 1-10，2006 年.
- 鈴木京子：Web 教材開発における学びの仕掛けとは何か—中学数学・授業研究からの示唆—。日本教育情報学会第 20 回年会，p. 132-133，2004 年.